

ウォーモルド 内視鏡下鼻副鼻腔・頭蓋底手術

Peter-John Wormald【原著】

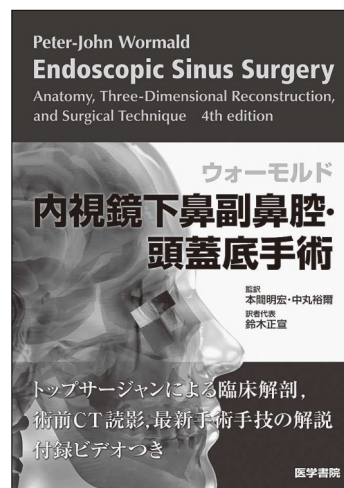
本間明宏，中丸裕爾【監訳】

鈴木正宣【訳者代表】

評者

寺坂俊介

社会医療法人柏葉会柏葉脳神経外科病院理事長・院長



私は脳神経外科医として顕微鏡手術を学び、現在も手術を継続している。北海道大学脳神経外科で初めて内視鏡手術が行われたのは、下垂体腺腫の手術だったと記憶している。私の部下が初めて下垂体腺腫に対して内視鏡手術を行ったときのことはいまでも鮮明に覚えている。私は術衣に着替え顕微鏡とともに手術室内に待機した。手術が難航した際には顕微鏡手術に切り替えるつもりだったからだ。当時の内視鏡はいまよりも解像度が低く、内視鏡手術用の道具も限られていた。顕微鏡手術の倍の手術時間と出血量を要したが、私は一度も手術を替わろうとは思わなかった。自分がどんなに工夫しても顕微鏡下手術では見えなかった海綿静脈洞壁や鞍上部がモニターに映し出されていたからである。

ウォーモルド先生が執筆された本書には内視鏡下手術の利点、特に優れた可視性を最大に生かした手術手技が網羅され、しかもその1つ1つが細部に至るまでしっかりと書かれている。例えば内視鏡下髄液漏閉鎖術の章で紹介される

バスプラグ法などは脂肪の採取の部位、糸のかけ方、使用する道具、術後の管理、腰椎ドレーンを入れた場合はその排液量までが細かく記載されている。「賛否が分かれるかもしれないが」とただし書きをつけたうえで、ウォーモルド先生の手技が紹介されている。本書を読んでいると、このような細かな手術手技や術後管理を学ぶにかつてはお金と時間を費やして海外にまで行ったのに、と思われる諸兄も多いはずである。

1990年代、本邦の頭蓋底手術は世界をリードしていた。しかし当時の日本には手術に必要な外科解剖を学ぶ方法が少なかった。われわれは海外のカダバーラボに在籍して毎日微小外科解剖の勉強をし、きたるべき手術に備えて解剖学的指標をアナログ写真に残していった。本書の特筆すべき点は、献体を使った高画質の微小外科解剖写真がふんだんに使用されていることである。例えば頭蓋底手術では手術の手順に沿って、蝶形骨洞、海綿静脈洞や斜台の解剖学的指標が明確に示され、それらはCT写真やナビゲーション画像と

連動してわれわれを安全な手術へ導いてくれている。スマートフォンでQRコードを読めば動画で手術道具の使い方や止血方法が解説される。微小外科解剖が安全な手術を行うためにいかに重要であるかを熟知した外科医の書いた手術書である。高画質の頭蓋底微小外科解剖が提示されているという点においては顕微鏡、内視鏡を問わず、頭蓋底手術に携わる多くの医師にぜひ読んでいただきたい手術書である。

最後に、しびれるような手術書を上梓したウォーモルド先生に敬意を表するとともに、日本語版の出版に尽力された北海道大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の医局員の先生方に心から感謝を申し上げたい。

A4・頁 328

2020年9月

定価：22,000円(本体20,000円+税)

[ISBN978-4-260-04200-0]

医学書院刊